

また、この強制収容はあまりにも突然であった。多くの人々が3～6日前に収容所行きを通告され、わずかな所持品だけをスーツケースに詰めて、営々と築き上げた生活をすべて捨て、収容所に送られた。送られた収容所は砂漠地帯や湿地帯という居住に適さない地域に建設されたバラックで、周囲を有刺鉄線で囲まれ、24時間兵士に監視されていた。一家族の居住スペースは6m四方の一部屋で、部屋には水道がないため、共同の洗面所と洗濯所に行かなければならなかった。収容所ではプライバシーがなく、長い行列、混雑した食堂等、常に混乱の中にあった。



収容所に送られる人々

全米日系人博物館には当時のバラックが移築保存され、収容所内での生活を記録する写真や品物が展示されている。当時を知る日系人の方からお話を伺うことができた。収容所の生活は確かに厳しかったが、監視兵は好意的であった。本来、収容所内の写真を撮ることは許されていなかったが、それを黙認してくれた。



移築され復元されたハートマウンテン収容所のバラックの一部

収容所内部の日系人の反応は、進んで政府の方針に従うことでこの混乱を乗り切ろうとした人、退去命令の違法性を法廷で問おうとした人、アメリカ陸軍への志願でアメリカへの忠誠を示そうとした人、収容所からの徴兵に異議を唱えた人など、様々であった。しかし、日系2世で編成された軍隊（第442連隊戦闘部隊）は、ヨーロッパ戦線における勇敢な戦いぶりで数々の武勲を立て、アメリカ人の日系人を見る目を大きく変えることになった。

4 戦後期

戦争終結により、収容所生活から解放された日系人たちは、再びからの出直しに直面した。すべてを失い、トレーラーハウスなどに住みながら仕事を探すという経済的苦しみとは別に、精神的打撃も大きかった。大半の2世は収容所の経験は恥ずべき歴史と考え、それについて沈黙を守り、ひたすら白人社会への同化を求めた。その結果、彼らは、「バナナ」（外は黄色で中は白）とか「卵」（まわりは白いが黄身が中央にある）と称されることになった。

1952年、「排日移民法」が修正され日系1世の帰化が認められたほか、日系人を苦しめていた「外国人土地法」が撤廃された。1962年にはハワイでダニエル・イノウエ氏が日系人初の上院議員に選出された。戦後、多くの日系人が急速に生活を再建し、経済的・政治的成功を成し遂げた。しかし、このような日系人の地位の向上は、アメリカ社会に日系人を「モデル・マイノリティ」と呼ぶステレオタイプを生むことになる。

1960年代から70年代にかけて、アメリカ国内で公民権運動や黒人解放運動が高まる中で、日系人の中でも日系人の強制収容に対する謝罪と損害賠償を求める運動が進展していった。当初、多くの日系人が苦しかった過去を思い出したり、心の奥に眠っている古傷に触られることに躊躇する傾向があったが、1980年代になると、議会で公聴会が開かれ多くの日系人が証言を行った。1988年には、レーガン大統領が日系人の強制収容に対する補償を規定した「市民的自由法」に署名し、アメリカ政府による謝罪文と2万ドルの個人補